

韓国人学習者の発話の数量的データと 母語話者が学習者に抱く対人印象の相関分析

崔 文姫

1. はじめに

近年日本語学習者の日本語に関する日本人評価研究¹が盛んである（小池 1998・原田 1998・小林 2000・渡部 2003 等）。これらの研究は主に日本語母語話者（以下、母語話者と称する）が日本語学習者（以下、学習者と称する）の発話に対してどのように思うのか、どの点に良い評価をし、どの点に悪い評価をするのか、また、どのような印象をうけるのか等といった母語話者の主観的な評価が中心となっている。

一方、母語話者の主観的評価だけではなく、実際の学習者の発話データから見られる客観的評価と母語話者の主観的評価との相関を検討した研究もある。

西郡（1997）では、外国人と日本人の初対面会話をもとに、日本人が外国人に対して抱く印象を調査しているが、その方法として、情報統合理論²に、学習者の会話の文字典しデータによって得られた量的データ（客観的データ）を加えて分析を行った。それによると、外国人の客観的データ（発話量、敬語使用率、情報要求発話率、オーバーラップ率等）が日本人に与える「好き-嫌い」の印象への影響は少なく、それよりもパラ言語や外見といった要素の影響が強いとされている。

また、石崎（1999）は、オーストラリア人日本語学習者の発話分析から得られた客観的評価と母語話者の主観的評価との比較を行い、語彙量と音声の主観的評価は、それぞれ異なり語数、音の高低の客観的評価との相関が認められ、わかりやすさの主観的評価は異なり語数及び音の高低と、また、癪にさわるかの主観的評価は音の高低及び不適切な区切りとの間に相関があったことを報告している。

崔（2005）では、韓国人日本語学習者 8 名（男女 4 人ずつ）と日本語母語話者（男性）による計 8 組の発話（それぞれ 5 分程度の内容）をビデオに収録し、131 名の母

¹ 日本人評価研究とは日本語学習者の日本語運用に対して日本語母語話者が何に注目しどのように評価するかを明らかにする研究のことで、狭義の教育課程における評価や測定だけに限定されたものではなく、印象や感想のレベルまでを含んだものとしている（小林 2000）。

² 印象を、主に「好ましい」かどうかという評価の次元からとらえ、「好ましさ」の評定値を刺激人物から出る様々な情報の評定値の代表的結合によって予測しようとする試みである（西郡 1997）。

語話者による評価を行った。評価項目は「言語・パラ言語及び非言語的特徴に関する評価」項目群と「対人印象に関する評価」項目群の二つで構成され、それぞれにおいて5段階評価を求めた。その結果、母語話者は韓国人学習者に対して、「社会的望ましさ」「個人的親しみやすさ」「活動性」という三つの潜在的な観点から印象を形成し、それらの対人印象形成の要因が学習者の言語形式的要素よりも非言語やパラ言語的要素と大きく関わることを明らかにした。しかし、この結果は母語話者の主観的な評価を中心としたものとなっており、学習者の発話に基づいた客観的評価と対人印象との相関をも検討する必要がある。

そこで、本稿は、西郡(1997)や石崎(1999)にならって、崔(2005)で得られた母語話者が学習者に抱く対人印象の主要素である「社会的望ましさ」「個人的親しみやすさ」「活動性」という三つの因子をもとに、韓国人学習者の発話の文字典しデータから対人印象と関わりがあると思われる分類項目をいくつか数量的に求め、それらの客観的な評価と母語話者が韓国人学習者に対して抱く対人印象(主観的評価)との相関分析を行うことを目的とする。

2. 調査・分析方法

2.1 発話の文字化及びコーディング作業

学習者の発話データ³を文字化し、いくつかの分類項目においてコーディング作業を行った。データの文字化に当たっては、BTSJ (Basic Transcription System for Japanese : 宇佐美 2003) を採用した。

まず、発話データについて、筆者が単独でセグメンテーション⁴と、後述する四つの観点からの分類を行った⁵。セグメンテーションについては、別データを用いて筆者と他の日本語教育専攻の院生との間で比較したところ、Cohen's κ が 0.90 という比較的高い一致度を得ており、一応の統計的基準に達していると言える(ブラウン 1999・西郡 2002 を参照)。また、分類項目においても、「スタイル」で 0.86、「オーバーラップ」で 0.73、「あいづち」では 0.81、「エラー」では 0.92 と、四項目すべてにおいて

³ 学習者の発話は崔(2005)で集めたものあり、本稿ではそれを元に分析を行う。発話に対する詳細に関しては崔(2005)を参照されたい。

⁴ 語られた内容をまとまりごとに区切ってラインを設定していくことである(西郡 1997)

⁵ 発話・ラインの定義については宇佐美(2003)、宇佐美・嶺田(1995)、スタイルとあいづちについては宇佐美(1993)に従っている。

Cohen's κ が一応の統計的基準に達していると言える結果になった⁶。

自然会話データは、研究の目的によりさまざまな細かい分析を行うことが可能であるが、本稿では、印象形成要因とその主要素の抽出を研究目的とすることから、上記の四つの項目が適当と判断した⁷。四項目のうち、「スタイル」と「あいづち」は発話ごとに、「オーバーラップ」と「文法・語用上のエラー」はラインごとに分類した。

「スタイル」は、各発話を、敬語（尊敬/謙譲）、敬体（「です/ます」の表現が含まれているものと、「はい/いいえ」の「はい」のように比較的フォーマリティーがある語彙が含まれているもの）、常体のいずれを使用しているかによって分類したものである。途中で発話が終了するようなもの、もしくは発話のスタイルがはっきりしないものはこの分類から外した。

「あいづち」については、ここでは細かい機能の分析が目的ではないので、広義に捉え、「ええ、ええ」から「ああ、そうですか」まで、相手の発話を聞いていることを示したり、相手の発話を促すために用いられたものすべてを含めた（宇佐美 1993 を参照）。さらに、ビデオの画像から、質問に対する返答ではなく明らかにあいづちの機能を持っていると思われる学習者の「うなずき」等も含めることにした。

また、ライン毎に分類したもののうち、「オーバーラップ」は、当該のラインが先行する相手の発話にオーバーラップしていないかどうか、もう一つは、当該のラインに文法・語用上のエラーがあるかどうかの分類である。

これらの各分類項目の結果はスプレッドシート・ソフト（Excel 2002）に入力し、データベース化⁸を試みた（西郡 1997 を参照）。その例を下の表 1 に示す⁹。

2.2 発話データの数量化

学習者の発話上の特徴と対人印象との関連をみるため、表 1 のような形でデータベース化された分類項目を元に、「スタイル」、「あいづち」、「オーバーラップ」、「文法・語用上のエラー」の頻度を数え、それぞれの比率を算出することによって、発話データの数量化を試みた（西郡 1997 を参照）。その算出方法や集計結果を以下の表 2 と 3

⁶ ただし、今回は学習者一人の発話に対してのみ一一致度を測定し、あとの 7 人については筆者一人で行った。

⁷ 先行研究（西郡 1997、川名 1986）及び調査時の被験者からの意見を参考に、対人印象と関わると思われる項目を筆者自身が選んだ。

⁸ データベース化された学習者全員の発話の内容に関しては崔（2005）を参照されたい。

⁹ 今回の研究は、学習者と母語話者（面接官）との発話の比較が目的ではないので、この表では学習者の発話のみ表示した。

に示す。

この集計結果を見ると、学習者それぞれにおいて発話量やスタイル、あいづち率等はまちまちで、同じ条件の限られた発話時間内でも学習者の発話形式はさまざまであることが分かる。

表1 データベース化された分類項目 (学習者「FF2」の場合)

ライン番号	発話文終了	あいづち	エラー				内容	
発話番号	スタイル	オーバーラップ	話した人				(前略)	
88	67-3	*	NP				FF2	んー[目を上にして考えて]、どのくらいかなあ〜<笑い>[独り言のように]、<まあ…><{>。
89	70	*					NS	<あつ、分かり><{>ました、大体分かりまし<笑い>い>。
90	71	*	PO				FF2	あつ、はい<笑い>。
91	72	*					NS	えっと、じゃ、バイトに出られるとしたら、都合がいいのは何曜日なんですか？。
92	73	*	PO				FF2	/沈黙2秒えっ、すみません。
93	74	*	PO					もう一度お願いくします><{>。
94	75-1						NS	<あの一、><{>アルバイトをする日なんですが＝、
95	76	*		*			FF2	あ一、はいっ。
96	75-2	*					NS	何曜日が都合がいいですか？。
97	77	*	PO				FF2	あ一、わたしは、あの一、週末ぐらいがいいですが一。
98	78	*					NS	週末というと、金曜日土<曜日…?><{>。
99	79	*	NP		*		FF2	<はい、><{>金曜日から日曜日まで＝。
100	80	*					NS	＝日曜日？。
101	81	*	PO				FF2	はい。
102	82	*					NS	うん、じゃあ、金曜日<土曜日…><{>【】。

(後略)

表注 1. スタイルの欄において、PO (polite) は敬体やフォーマルな表現が含まれる発話、NP (non-polite) は常体の発話、また、表中にはないが HH (honorific/humble) は敬語が含まれる発話を表す。途中終了の発話やスタイルでの分類が困難なものは空白にしてある。

表注 2. 発話文終了・あいづち・オーバーラップ・エラーの欄では、それぞれに該当する行に「*」が付されている。また、表中にはないが、あいづちについては、相手の話の途中 (1 ラインの途中) にあいづちを挟んだ場合には、相手の発話ラインに「*」が付されている。同じラインであいづちが二回であれば「**」となっている。また、エラーについては文の中に「*」は入れていない。

表2 分析に用いる変数及び算出方法

1. 敬語使用率：敬語を使用した発話数/総発話数
2. 敬体使用率：敬体を使用した発話数/総発話数
3. 常体使用率：常体を使用した発話数/総発話数
4. あいづち率：あいづちを打った発話数/総発話数
5. オーバーラップ率：オーバーラップしたライン数/総ライン数
6. エラー率：文法・語用上のエラーを起こしたライン数/総ライン数

表3 変数集計結果

学習者番号	FM1	FF1	FM2	FF2	FM3	FF3	FM4	FF4	平均	
総	行数	99	94	110	161	133	190	122	126	129.38
	発話数	91	91	105	136	115	160	111	115	115.50
学習者の 度数	行数	47	45	51	79	63	99	57	60	62.63
	発話数	46	45	47	70	57	85	56	59	58.13
	スタ イル	HH	2	1	2	0	1	1	1	1.13
		PO	34	36	28	44	26	56	41	38.75
		NP	1	1	6	8	3	15	1	5.13
		あいづち	14	9	6	19	30	29	25	13.25
		オーバーラップ	13	7	9	14	12	22	17	17.88
		エラー	9	2	9	11	6	21	7	9.75
		1.敬語使用率	0.0435	0.0222	0.0426	0.0000	0.0175	0.0118	0.0179	0.0169
	2.敬体使用率	0.7391	0.8000	0.5957	0.6286	0.4561	0.6588	0.8036	0.6949	0.67
	3.常体使用率	0.0217	0.0222	0.1277	0.1143	0.0526	0.1765	0.0179	0.1017	0.08
	4.あいづち率	0.2979	0.2000	0.1176	0.2405	0.4762	0.2929	0.4386	0.1833	0.28
	5.オーバーラップ率	0.2766	0.1556	0.1765	0.1772	0.1905	0.2222	0.2982	0.2000	0.21
	6.エラー率	0.1915	0.0444	0.1765	0.1392	0.0952	0.2121	0.1228	0.2167	0.15

表注：学習者番号において、最初のFは「Foreigner」、二番目のM/Fは性別（M：Male, F：Female）を、最後の数字は参加者番号を表す。例）FM1：外国人（留学生）、男性の参加者番号1

2.3 学習者に抱く対人印象と発話の数量的データとの関連

2.3.1 相関係数とその結果

上記の方法で数量化されたデータと対人印象因子との相関を調べるために、まず、スピアマンの順位相関係数を用いて検討する。その結果を以下の表4に示す。この結果を見ると、学習者の「敬語使用率」「常体使用率」「あいづち率」は「対人印象因子」のすべての因子に関わると言える。また、「敬体使用率」は「社会的望ましさ」と、「オーバーラップ率」は「活動性」と関わり、「エラー率」は「個人的親しみやすさ」を除

いた二つの因子に関わる。しかし、「敬語使用率」と「個人的親しみやすさ」との相関（負の相関）、「敬語使用率」と「活動性」との相関（負の相関）の二つ以外は、有意差があるとは言え、その相関は非常に弱い。

これらの結果から推測されることは、母語話者は、「敬語使用率」が高い学習者に対しては「個人的親しみやすさ」や「活動性」という観点においてマイナスの印象を持つこと、逆に、「常体使用率」が高い学習者に対しては「個人的親しみやすさ」や「活動性」においてプラスの印象を持つこと、また、「常体使用率」が高い学習者には「社会的望ましさ」についてマイナスの印象を持つこと、「文法・語用上のエラー」が多い学習者に対しても「社会的望ましさ」という点でマイナスの印象を持つことである。また、「敬語使用率」と「社会的望ましさ」との相関係数をみると、有意な相関はあるが、その係数が非常に低い。さらに、「敬語使用率」と「個人的親しみやすさ」との間、「敬語使用率」と「活動性」との間の相関を除けば、全体的に有意差はあってもその相関は弱い。ただし、スピアマン係数 ρ は単相関の有無を測るための分析方法で、それ以外の相関様式に対しては相関係数が低く算出されることが少なくない。そこで、より詳しく関連を調べるため、分散分析を行うことにした。

表4 数量的データと対人印象因子との相関

	対人印象因子		
	社会的望ましさ	個人的親しみやすさ	活動性
敬語使用率	-0.09**	-0.51**	-0.45**
敬体使用率	0.12**	0.03	-0.01
常体使用率	-0.24**	0.21**	0.25**
あいづち率	0.21**	0.07*	0.11**
オーバーラップ率	0.01	-0.03	0.11**
エラー率	-0.31**	-0.04	0.08**

* $p < 0.05$ / ** $p < 0.01$

2.3.2 分散分析の結果

2.3.2.1 対人印象の第1因子「社会的望ましさ」と発話の数量的データとの相関

まず、母語話者が各学習者の発話に対して「社会的望ましさ」という観点から行った評価値の記述統計を下の表5に示す。この表では、「敬語」「敬体」「常体」等の分類項目ごとに、夫々その項目の比率が高い順に（上から下へ）発話者を並べた。続けて、表6は学習者の発話の数量的データをペアごとに多重比較したものの結果である。

表5 発話の分類項目別比率順と「社会的望ましさ」に関する評価値の記述統計

敬語	平均値	標準偏差	敬体	平均値	標準偏差	常体	平均値	標準偏差
FF2	35.72	6.38	FM3	37.38	6.01	FM4	39.24	5.41
FF3	32.98	5.71	FM2	32.79	5.41	FM1	33.40	5.02
FF4	33.47	6.29	FF2	35.72	6.38	FF1	37.01	5.70
FM3	37.38	6.01	FF3	32.98	5.71	FM3	37.38	6.01
FM4	39.24	5.41	FF4	33.47	6.29	FF4	33.47	6.29
FF1	37.01	5.70	FM1	33.40	5.02	FF2	35.72	6.38
FM2	32.79	5.41	FF1	37.01	5.70	FM2	32.79	5.41
FM1	33.40	5.02	FM4	39.24	5.41	FF3	32.98	5.71
あい づち	平均値	標準偏差	オーバ ー	平均値	標準偏差	エラー	平均値	標準偏差
FM2	32.79	5.41	FF1	37.01	5.70	FF1	37.01	5.70
FF4	33.47	6.29	FM2	32.79	5.41	FM3	37.38	6.01
FF1	37.01	5.70	FF2	35.72	6.38	FM4	39.24	5.41
FF2	35.72	6.38	FM3	37.38	6.01	FF2	35.72	6.38
FF3	32.98	5.71	FF4	33.47	6.29	FM2	32.79	5.41
FM1	33.40	5.02	FF3	32.98	5.71	FM1	33.40	5.02
FM4	39.24	5.41	FM1	33.40	5.02	FF3	32.98	5.71
FM3	37.38	6.01	FM4	39.24	5.41	FF4	33.47	6.29

表5の「社会的望ましさ」という観点からの評価の平均値と、各分類項目の学習者の順番との関係を下の図1～図6に表した。これらの図において、縦の軸は「母語話者の評価の平均値」を、横の軸は「分類項目の比率順」を表し、以降の図7～図18においても同様である。

ここで、図1をみると母語話者の「社会的望ましさ」に関する印象は、敬語を多く使う学習者に対して良くなるとも、敬語を使わない学習者に対して悪くなるとも言い難い。表4に示したスピーアマンの相関係数では、「敬語使用率」と「社会的望ましさ」の間には負の相関が見られたが、図1からはそれも言い難いということになる。今回の調査では学習者の敬語の使用頻度が元々低いという問題はあるが、調査結果からは学習者の「敬語使用率」と母語話者の「社会的望ましさ」という印象とはあまり関連がないことが示唆されている。次に、図2～図6は、「敬体使用率」「常体使用率」「あいづち率」「オーバーラップ率」「エラー率」と、「社会的望ましさ」の評価との関係を図示したものである。スピーアマンの相関係数においては「敬体使用率」「常体使用率」「あいづち率」「エラー率」に弱い相関が見られたが、多重比較を試みた結果、「エラー率」を除いた項目については、ここでも相関を裏付ける結果にはなっていない。「エ

ラー率」に関しては、学習者の文法・語用上のエラー率が高ければ高いほど、母語話者が学習者に対して抱く「社会的望ましさ」という点に関する印象が悪くなることが図6から見て取れる¹⁰。

表6 発話の数量的データに関する多重比較¹¹

敬語使用率			敬体使用率			常体使用率			あいづち率			オーバーラップ率			エラー率		
A	B	A-B	A	B	A-B	A	B	A-B									
FF2	FF3	2.74	FM3	FM2	4.60	FM4	FM1	5.85	FM2	FF4	-0.68	FF1	FM2	4.22	FF1	FM3	-0.37
	FF4	2.25		FF2	1.66		FF1	2.24		FF1	-4.22		FF2	1.29		FM4	-2.24
	FM3	-1.66		FF3	4.40		FM3	1.88		FF2	-2.93		FM3	-0.37		FF2	1.29
	FM4	-3.53		FF4	3.92		FF4	5.78		FF3	-0.19		FF4	3.54		FM2	4.22
	FF1	-1.29		FM1	3.98		FF2	3.53		FM1	-0.61		FF3	4.03		FM1	3.61
	FM2	2.93		FF1	0.37		FM2	6.46		FM4	-6.46		FM1	3.81		FF3	4.03
	FM1	2.32		FM4	-1.88		FF3	6.27		FM3	-4.60		FM4	-2.24		FF4	3.54
FF3	FF4	-0.49	FM2	FF2	-2.93	FM1	FF1	-3.61	FF4	FF1	-3.54	FM2	FF2	-2.93	FM3	FM4	-1.88
	FM3	-4.40		FF3	-0.19		FM3	-3.88		FF2	-2.25		FM3	-4.60		FF2	1.66
	FM4	-6.27		FF4	-0.68		FF4	-0.07		FF3	0.49		FF4	-0.68		FM2	4.60
	FF1	-4.03		FM1	-0.61		FF2	-2.32		FM1	0.07		FF3	-0.19		FM1	3.98
	FM2	0.19		FF1	-4.22		FM2	0.61		FM4	-5.78		FM1	-0.61		FF3	4.40
	FM1	-0.42		FM4	-6.46		FF3	0.42		FM3	-3.92		FM4	-6.46		FF4	3.92
FF4	FM3	-3.92	FF2	FF3	2.74	FF1	FM3	-0.37	FF1	FF2	1.29	FF2	FM3	-1.66	FM4	FF2	3.53
	FM4	-5.78		FF4	2.25		FF4	3.54		FF3	4.03		FF4	2.25		FM2	6.46
	FF1	-3.54		FM1	2.32		FF2	1.29		FM1	3.81		FF3	2.74		FM1	5.85
	FM2	0.68		FF1	-1.29		FM2	4.22		FM4	-2.24		FM1	2.32		FF3	6.27
	FM1	0.07		FM4	-3.53		FF3	4.03		FM3	-0.37		FM4	-3.53		FF4	5.78
FM3	FM4	-1.88	FF3	FF4	-0.49	FM3	FF4	3.92	FF2	FF3	2.74	FM3	FF4	3.92	FF2	FM2	2.93
	FF1	0.37		FM1	-0.42		FF2	1.66		FM1	2.32		FF3	4.40		FM1	2.32
	FM2	4.60		FF1	-3.03		FM2	4.60		FM4	-3.53		FM1	3.98		FF3	2.74
	FM1	3.98		FM4	-6.27		FF3	4.40		FM3	-1.66		FM4	-1.88		FF4	2.25
FM4	FF1	2.24	FF4	FM1	0.07	FF4	FF2	-2.25	FF3	FM1	-0.42	FF4	FF3	0.49	FM2	FM1	-0.61
	FM2	6.46		FF1	-3.54		FM2	0.68		FM4	-6.27		FM1	0.07		FF3	-0.19
	FM1	5.85		FM4	-5.78		FF3	0.49		FM3	-4.40		FM4	-5.78		FF4	-0.68
FF1	FM2	4.22	FM1	FF1	-3.61	FF2	FM2	2.93	FM1	FM4	-5.85	FF3	FM1	-0.42	FM1	FF3	0.42
	FM1	3.61		FM4	-5.85		FF3	2.74		FM3	-3.92		FM4	-6.27		FF4	-0.07
FM2	FM1	-0.61	FF1	FM4	-2.24	FM2	FF3	-0.19	FM4	FM3	1.88	FM1	FM4	-5.85	FF3	FF4	-0.49

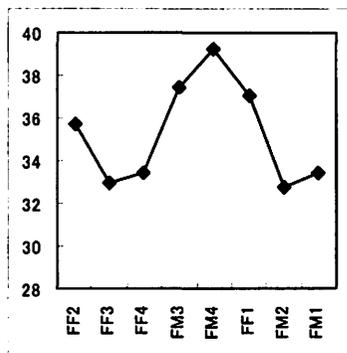
* 網掛けの部分は、平均値の差が5%水準で有意であることを表す。

*AとBは学習者、(A-B)はAとBの平均値の差

¹⁰ 図6で、学習者FM2, FM1, FF3, FF4の間には有意差がない。

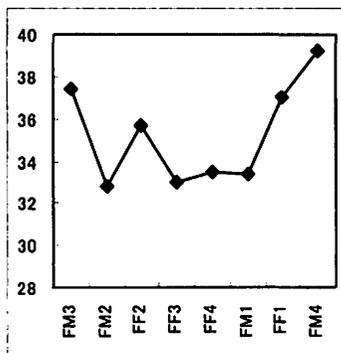
¹¹ 信頼区間の調整は、一般的に使われる「Bonferroni」を用いた(小塩 2004を参照)。

つまり、母語話者は、学習者の「エラー率」に関しては「社会的望ましさ」というパーソナリティの評価基準としているが、学習者の「敬語使用率」「敬体使用率」「常体使用率」「あいづち率」「オーバーラップ率」に関しては、「社会的望ましさ」の評価基準としていないことが分った。



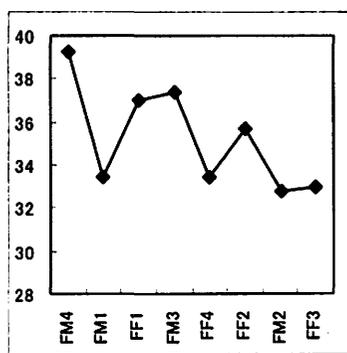
低 ← 学習者の敬語使用率 → 高

図1 「社会的望ましさ」と「敬語使用率」との関連



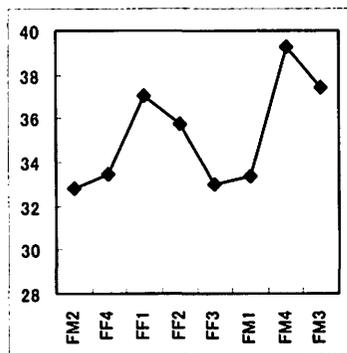
低 ← 学習者の敬体使用率 → 高

図2 「社会的望ましさ」と「敬体使用率」との関連



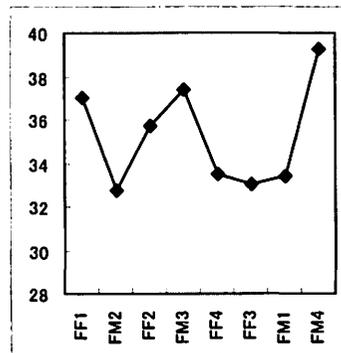
低 ← 学習者の常体使用率 → 高

図3 「社会的望ましさ」と「常体使用率」との関連



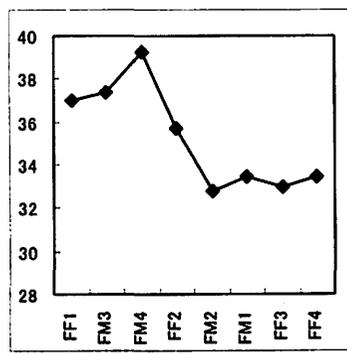
低 ← 学習者のあいづち率 → 高

図4 「社会的望ましさ」と「あいづち率」との関連



低 ← オーバーラップ率 → 高

図5 「社会的望ましさ」と「オーバーラップ率」との関連



低 ← 学習者のエラー率 → 高

図6 「社会的望ましさ」と「エラー率」との関連

2.3.2.2 対人印象の第2因子「個人的親しみやすさ」と数量的データとの相関

次に、母語話者の「個人的親しみやすさ」という対人印象形成要因と、学習者の発話の数量的データとの関連を検討する。以下の表7には、各学習者の発話に対する「個人的親しみやすさ」という観点からの母語話者の評価値の記述統計を、表8には、学習者の発話の数量的データをペアごとに多重比較したものの結果を示した。

表7 発話の分類項目別比率順と「個人的親しみやすさ」に関する評価値の記述統計

敬語	平均値	標準偏差	敬体	平均値	標準偏差	常体	平均値	標準偏差
FF2	33.00	5.40	FM3	28.57	5.88	FM4	30.82	5.13
FF3	35.43	5.17	FM2	25.86	4.55	FM1	24.35	4.74
FF4	28.59	6.29	FF2	33.00	5.40	FF1	30.62	5.34
FM3	28.57	5.88	FF3	35.43	5.17	FM3	28.57	5.88
FM4	30.82	5.13	FF4	28.59	6.29	FF4	28.59	6.29
FF1	30.62	5.34	FM1	24.35	4.74	FF2	33.00	5.40
FM2	25.86	4.55	FF1	30.62	5.34	FM2	25.86	4.55
FM1	24.35	4.74	FM4	30.82	5.13	FF3	35.43	5.17
あい づち	平均値	標準偏差	オーバ ー	平均値	標準偏差	エラー	平均値	標準偏差
FM2	25.86	4.55	FF1	30.62	5.34	FF1	30.62	5.34
FF4	28.59	6.29	FM2	25.86	4.55	FM3	28.57	5.88
FF1	30.62	5.34	FF2	33.00	5.40	FM4	30.82	5.13
FF2	33.00	5.40	FM3	28.57	5.88	FF2	33.00	5.40
FF3	35.43	5.17	FF4	28.59	6.29	FM2	25.86	4.55
FM1	24.35	4.74	FF3	35.43	5.17	FM1	24.35	4.74
FM4	30.82	5.13	FM1	24.35	4.74	FF3	35.43	5.17
FM3	28.57	5.88	FM4	30.82	5.13	FF4	28.59	6.29

表7の母語話者の評価の平均値と学習者の各分類項目の順番との関係を下の図7～図12に表した。これらの図表から、学習者の発話データと母語話者の「個人的親しみやすさ」との関連を考察する。

ここでは、学習者の「敬語使用率」と母語話者の「個人的親しみやすさ」との間に相関が見られる(図7参照)。これは、表4のスピーアマンの相関係数でも負の相関を見せていたが、この多重比較の結果においても、学習者が敬語をたくさん使えば使うほど母語話者の「個人的親しみやすさ」についての印象が悪くなることが示唆される。

また、スピーアマンの相関係数からは、「常体使用率」と「個人的親しみやすさ」との間、「エラー率」と「個人的親しみやすさ」との間に弱い正の相関が見られたが、ここではそれを裏付ける結果にはなっていない。

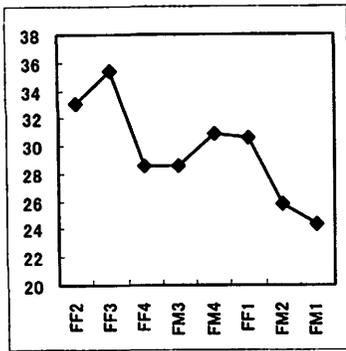
つまり、今回の分析では、日本語母語話者は学習者の「敬語使用率」を「個人的親しみやすさ」の評価基準としているが、学習者の「敬体使用率」「常体使用率」「あいづち率」「オーバーラップ率」「エラー率」に関しては、「個人的親しみやすさ」の評価基準としていないことが分かった。すなわち、これらとは別の要因によって「個人的な親しみやすさ」という点での印象がよくなると推測される。

表8 発話の数量的データに関する多重比較

敬語使用率			敬体使用率			常体使用率			あいづち率			オーバーラップ率			エラー率		
A	B	A-B	A	B	A-B	A	B	A-B									
FF2	FF3	-2.43	FM3	FM2	2.71	FM4	FM1	6.47	FM2	FF4	-2.73	FF1	FM2	4.76	FF1	FM3	2.05
	FF4	4.41		FF2	-4.43		FF1	0.20		FF1	-4.76		FF2	-2.38		FM4	-0.20
	FM3	4.43		FF3	-6.85		FM3	2.24		FF2	-7.14		FM3	2.05		FF2	-2.38
	FM4	2.18		FF4	-0.02		FF4	2.23		FF3	-6.56		FF4	2.03		FM2	4.76
	FF1	2.38		FM1	4.22		FF2	-2.18		FM1	1.51		FF3	-4.81		FM1	6.27
	FM2	7.14		FF1	-2.05		FM2	4.95		FM4	-4.95		FM1	6.27		FF3	-4.81
	FM1	8.65		FM4	-2.24		FF3	-4.61		FM3	-2.71		FM4	-0.20		FF4	2.03
FF3	FF4	6.84	FM2	FF2	-7.14	FM1	FF1	-6.27	FF4	FF1	-2.03	FM2	FF2	-7.14	FM3	FM4	-2.24
	FM3	6.85		FF3	-9.56		FM3	-4.22		FF2	-4.41		FM3	-2.71		FF2	-4.43
	FM4	4.81		FF4	-2.73		FF4	-4.24		FF3	-6.84		FF4	-2.73		FM2	2.71
	FF1	4.81		FM1	1.51		FF2	-8.65		FM1	4.24		FF3	-9.56		FM1	4.22
	FM2	9.56		FF1	-4.76		FM2	-1.51		FM4	-2.23		FM1	1.51		FF3	-6.85
	FM1	11.08		FM4	-4.95		FF3	-11.1		FM3	0.02		FM4	-4.95		FF4	-0.02
FF4	FM3	0.02	FF2	FF3	-2.43	FF1	FM3	2.05	FF1	FF2	-2.38	FF2	FM3	4.43	FM4	FF2	-2.18
	FM4	-2.23		FF4	4.41		FF4	2.03		FF3	-4.81		FF4	4.41		FM2	4.85
	FF1	-2.03		FM1	8.65		FF2	-2.38		FM1	6.27		FF3	-2.43		FM1	6.47
	FM2	2.73		FF1	2.38		FM2	4.76		FM4	-0.20		FM1	8.65		FF3	-4.61
	FM1	4.24		FM4	2.18		FF3	-4.81		FM3	2.05		FM4	2.18		FF4	2.23
FM3	FM4	-2.24	FF3	FF4	6.84	FM3	FF4	-0.02	FF2	FF3	-2.43	FM3	FF4	-0.02	FF2	FM2	7.14
	FF1	-2.05		FM1	11.08		FF2	-4.43		FM1	8.65		FF3	-6.85		FM1	8.65
	FM2	2.71		FF1	4.81		FM2	2.71		FM4	2.18		FM1	4.22		FF3	-2.43
	FM1	4.22		FM4	4.81		FF3	-6.85		FM3	4.43		FM4	-2.24		FF4	4.41
FM4	FF1	0.20	FF4	FM1	4.24	FF4	FF2	-4.41	FF3	FM1	11.08	FF4	FF3	-6.84	FM2	FM1	1.51
	FM2	4.85		FF1	-2.03		FM2	2.73		FM4	4.61		FM1	4.24		FF3	-9.56
	FM1	6.47		FM4	-2.23		FF3	-6.84		FM3	6.85		FM4	-2.23		FF4	-2.73
FF1	FM2	4.76	FM1	FF1	-6.27	FF2	FM2	7.14	FM1	FM4	-6.47	FF3	FM1	11.08	FM1	FF3	-11.1
	FM1	6.27		FM4	-6.47		FF3	-2.43		FM3	-4.22		FM4	4.61		FF4	-4.24
FM2	FM1	1.51	FF1	FM4	-0.20	FM2	FF3	-9.56	FM4	FM3	2.24	FM1	FM4	-6.47	FF3	FF4	6.84

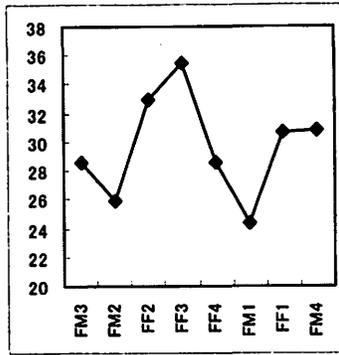
*網掛けの部分は、平均値の差が5%水準で有意であることを表す。

*AとBは学習者、(A-B)はAとBの平均値の差



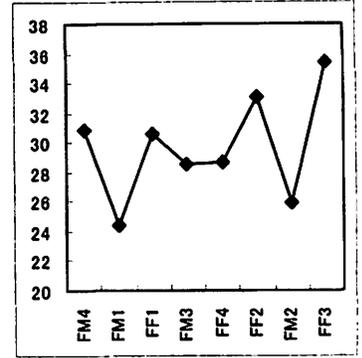
低 ← 学習者の敬語使用率 → 高

図7 「個人的親しみやすさ」と「敬語使用率」との関連



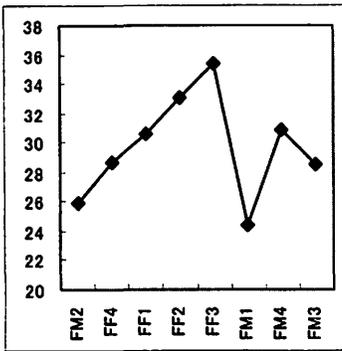
低 ← 学習者の敬体使用率 → 高

図8 「個人的親しみやすさ」と「敬体使用率」との関連



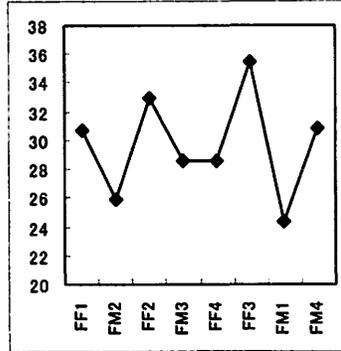
低 ← 学習者の常体使用率 → 高

図9 「個人的親しみやすさ」と「常体使用率」との関連



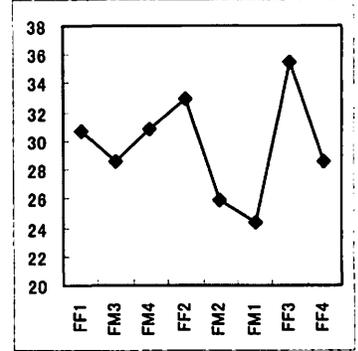
低 ← 学習者のあいづち率 → 高

図10 「個人的親しみやすさ」と「あいづち率」との関連



低 ← オーバーラップ率 → 高

図11 「個人的親しみやすさ」と「オーバーラップ率」との関連



低 ← 学習者のエラー率 → 高

図12 「個人的親しみやすさ」と「エラー率」との関連

2.3.2.3 対人印象の第3因子「活動性」と数量的データとの相関

最後に、学習者の発話の数量的データと母語話者の「活動性」についての印象との関連を検討する。以下の表9には、各学習者の発話に対する「活動性」という観点からの母語話者の評価値の記述統計を示す。ここでも、各項目の比率の順に学習者を並べた。続けて、表10には学習者の発話の数量的データをペアごとに多重比較したものの結果を示した。

また、表9の母語話者の評価の平均値と学習者の各分類項目の順番との関係を下の図13～図18に表した。これらの結果は、すべての分類項目において、前述の「個人的親しみやすさ」の傾向と近い。ここでも、学習者の「敬語使用率」と母語話者の「活動性」との間に相関が見られる(図13参照)。この結果は、表4に示したスピアマン

の相関係数による検討を裏付けるものであり、学習者が敬語をたくさん使えば使うほど母語話者の「活動性」についての印象が良いとは言えない。また、スピアマンの相関係数では、学習者の「常体使用率」「あいづち率」「オーバーラップ率」「エラー率」と母語話者の「活動性」との間に弱い正の相関が見られたが、図 15～図 18 を見ると、相関があるとは言い難い。

表 9 発話の分類項目別比率順と「活動性」に関する評価値の記述統計

敬語	平均値	標準偏差	敬体	平均値	標準偏差	常体	平均値	標準偏差
FF2	28.91	4.73	FM3	25.77	5.01	FM4	28.34	3.99
FF3	32.15	4.15	FM2	24.04	4.25	FM1	22.86	4.95
FF4	26.20	5.39	FF2	28.91	4.73	FF1	25.29	4.89
FM3	25.77	5.01	FF3	32.15	4.15	FM3	25.77	5.01
FM4	28.34	3.99	FF4	26.20	5.39	FF4	26.20	5.39
FF1	25.29	4.89	FM1	22.86	4.95	FF2	28.91	4.73
FM2	24.04	4.25	FF1	25.29	4.89	FM2	24.04	4.25
FM1	22.86	4.95	FM4	28.34	3.99	FF3	32.15	4.15
あいづち	平均値	標準偏差	オーバー	平均値	標準偏差	エラー	平均値	標準偏差
FM2	24.04	4.25	FF1	25.29	4.89	FF1	25.29	4.89
FF4	26.20	5.39	FM2	24.04	4.25	FM3	25.77	5.01
FF1	25.29	4.89	FF2	28.91	4.73	FM4	28.34	3.99
FF2	28.91	4.73	FM3	25.77	5.01	FF2	28.91	4.73
FF3	32.15	4.15	FF4	26.20	5.39	FM2	24.04	4.25
FM1	22.86	4.95	FF3	32.15	4.15	FM1	22.86	4.95
FM4	28.34	3.99	FM1	22.86	4.95	FF3	32.15	4.15
FM3	25.77	5.01	FM4	28.34	3.99	FF4	26.20	5.39

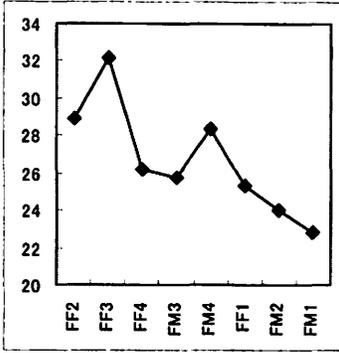
つまり、学習者の「敬語使用率」を除いた、「敬体使用率」「常体使用率」「あいづち率」「オーバーラップ率」「エラー率」に関しては、母語話者の「活動性」という印象の評価基準にならないことが分かった。なお、このような結果は、「個人的な親しみやすさ」に対する結果とほぼ同様であるが、その原因として次のようなことが考えられる。学習者の発話に対する母語話者の「対人印象に対する評価」の因子分析を行う段階で、第2因子である「個人的な親しみやすさ」の構成項目と第3因子の「活動性」の構成項目には、いくつか重なる項目が存在した。それらの項目はどちらにも因子負荷量を高く示しており、両因子の要因として扱うことにしたが、それがここでの結果に影響を与えた可能性がある。

表 10 発話の数量的データに関する多重比較

敬語使用率			敬体使用率			常体使用率			あいづち率			オーバーラップ率			エラー率		
A	B	A-B	A	B	A-B	A	B	A-B									
FF2	FF3	-3.24	RM3	RM2	1.73	RM4	RM1	5.48	RM2	FF4	-2.16	FF1	RM2	1.25	FF1	RM3	-0.48
	FF4	2.71		FF2	-3.14		FF1	3.05		FF1	-1.25		FF2	-3.62		RM4	-3.05
	RM3	3.14		FF3	-6.38		RM3	2.57		FF2	-4.87		RM3	-0.48		FF2	-3.62
	RM4	0.56		FF4	-0.43		FF4	2.15		FF3	-8.11		FF4	-0.91		RM2	1.25
	FF1	3.62		RM1	2.91		FF2	-0.56		RM1	1.18		FF3	-6.86		RM1	2.43
	RM2	4.87		FF1	0.48		RM2	4.31		RM4	-4.31		RM1	2.43		FF3	-6.86
	RM1	6.05		RM4	-2.57		FF3	-3.81		RM3	-1.73		RM4	-3.05		FF4	-0.91
FF3	FF4	5.95	RM2	FF2	-4.87	RM1	FF1	-2.43	FF4	FF1	0.91	RM2	FF2	-4.87	RM3	RM4	-2.57
	RM3	6.38		FF3	-8.11		RM3	-2.91		FF2	-2.71		RM3	-1.73		FF2	-3.14
	RM4	3.81		FF4	-2.16		FF4	-3.34		FF3	-5.95		FF4	-2.16		RM2	1.73
	FF1	6.86		RM1	1.18		FF2	-6.05		RM1	3.34		FF3	-8.11		RM1	2.91
	RM2	8.11		FF1	-1.25		RM2	-1.18		RM4	-2.15		RM1	1.18		FF3	-6.38
	RM1	9.29		RM4	-4.31		FF3	-9.29		RM3	0.43		RM4	-4.31		FF4	-0.43
FF4	RM3	0.43	FF2	FF3	-3.24	FF1	RM3	-0.48	FF1	FF2	-3.62	FF2	RM3	3.14	RM4	FF2	-0.56
	RM4	-2.15		FF4	2.71		FF4	-0.91		FF3	-6.86		FF4	2.71		RM2	4.31
	FF1	0.91		RM1	6.05		FF2	-3.62		RM1	2.43		FF3	-3.24		RM1	5.48
	RM2	2.16		FF1	3.62		RM2	1.25		RM4	-3.05		RM1	6.05		FF3	-3.81
	RM1	3.34		RM4	0.56		FF3	-6.86		RM3	-0.48		RM4	0.56		FF4	2.15
RM3	RM4	-2.57	FF3	FF4	5.95	RM3	FF4	-0.43	FF2	FF3	-3.24	RM3	FF4	-0.43	FF2	RM2	4.87
	FF1	0.48		RM1	9.29		FF2	-3.14		RM1	6.05		FF3	-6.38		RM1	6.05
	RM2	1.73		FF1	6.86		RM2	1.73		RM4	0.56		RM1	2.91		FF3	-3.24
	RM1	2.91		RM4	3.81		FF3	-6.38		RM3	3.14		RM4	-2.57		FF4	2.71
RM4	FF1	3.05	FF4	RM1	3.34	FF4	FF2	-2.71	FF3	RM1	9.29	FF4	FF3	-5.95	RM2	RM1	1.18
	RM2	4.31		FF1	0.91		RM2	2.16		RM4	3.81		RM1	3.34		FF3	-8.11
	RM1	5.48		RM4	-2.15		FF3	-5.95		RM3	6.38		RM4	-2.15		FF4	-2.16
FF1	RM2	1.25	RM1	FF1	-2.43	FF2	RM2	4.87	RM1	RM4	-5.48	FF3	RM1	9.29	RM1	FF3	-9.29
	RM1	2.43		RM4	-5.48		FF3	-3.24		RM3	-2.91		RM4	3.81		FF4	-3.34
RM2	RM1	1.18	FF1	RM4	-3.05	RM2	FF3	-8.11	RM4	RM3	2.57	RM1	RM4	-5.48	FF3	FF4	5.95

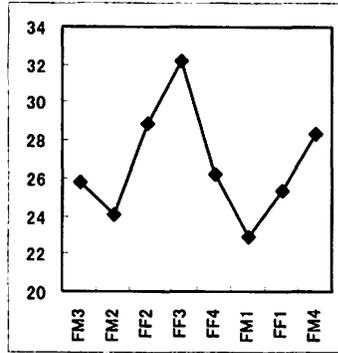
* 網掛けの部分は、平均値の差が5%水準で有意であることを表す。

*AとBは学習者、(A-B)はAとBの平均値の差



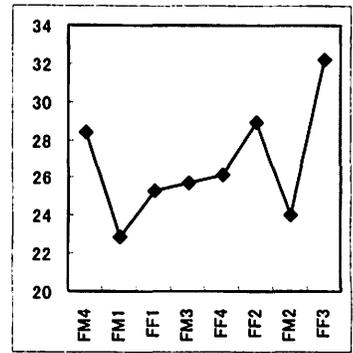
低 ← 学習者の敬語使用率 → 高

図13 「活動性」と「敬語使用率」との関連



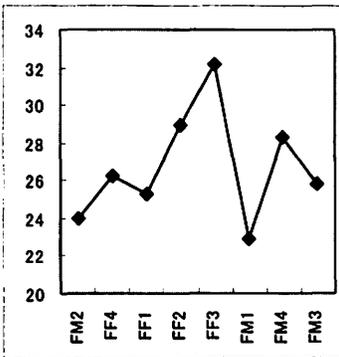
低 ← 学習者の敬体使用率 → 高

図14 「活動性」と「敬体使用率」との関連



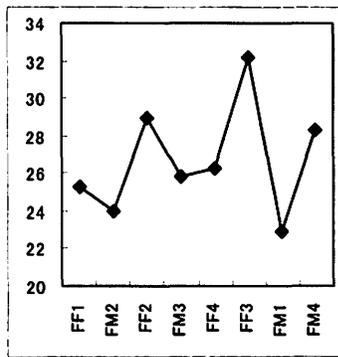
低 ← 学習者の常体使用率 → 高

図15 「活動性」と「常体使用率」との関連



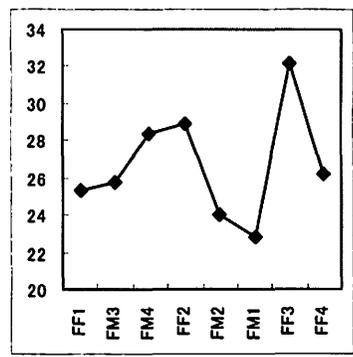
低 ← 学習者のあいづち率 → 高

図16 「活動性」と「あいづち率」との関連



低 ← オーバーラップ率 → 高

図17 「活動性」と「オーバーラップ率」との関連



低 ← 学習者のエラー率 → 高

図18 「活動性」と「エラー率」との関連

3. まとめと考察

本稿では、韓国人学習者の発話を文字化し、文字化されたデータを発話ごとに「スタイル」「あいづち」「オーバーラップ」「エラー」の項目に分類し、そこから得られた数量的データと母語話者の韓国人学習者に対して抱く対人印象との相関を検討した。その結果、次のようなことが明らかになった。

今回、対人印象形成と関わりがあると思われる発話上の特徴を分類項目として選んだにも関わらず、全体的に、それらの分類項目と母語話者の印象形成要因との相関は低かった。この結果から、母語話者の対人印象を形成する要因には今回の分類項目以外の要素も働くことが考えられ、また、崔 (2005) で明らかにしたように、学習者の言

語能力よりやはり非言語やパラ言語的な要素のほうが対人印象との相関が大きいということも考えられる。

ただし、ここでも、学習者の「文法・語用上のエラー率」、「敬語使用率」という二つの項目については母語話者の印象形成要因との相関を見せている。

日本語母語話者が韓国人学習者に対して抱く対人印象の一番の要因である「社会的望ましさ」というパーソナリティ因子については、学習者の「文法・語用上のエラー率」との間で負の相関があった。つまり、韓国人学習者が日本語を話していてエラーが多くなると、母語話者は韓国人学習者に対する「社会的望ましさ」という観点の評価を厳しくし、良い印象を持たないことになる。学習者が日本の社会に出て日本人とコミュニケーションを行う際に、日本語の文法を間違えたり、語用上のエラーが多いと母語話者は学習者に対する「社会的望ましさ」の観点においてマイナス評価をされると考えられる。従って、日本語学習者が日本人と円滑なコミュニケーションを取るためには、まず日本語の運用能力を養うべきであることがここでは示唆される。

次に、母語話者の韓国人学習者に対する「個人的親しみやすさ」や「活動性」という観点からの印象は、学習者の「敬語使用率」との間で負の相関があった。つまり、日本語母語話者は、敬語をたくさん使う韓国人学習者に対しては「個人的親しみやすさ」を感じにくく、さらに「活動性」という観点においても印象の評価が低くなると言える。日ごろ敬語で話をしたり話かけられたりする相手とはなかなか打ち解けられない（近づきにくい）感覚があるが、そういったことから考えると、この結果は当然であると言えるのではないだろうか。

最後に、今後の課題として、母語話者の対人印象形成要因に影響を与える発話の要素として本稿で取り上げた分類項目が少ないという点が挙げられる。これらの項目をもって母語話者が学習者に抱く印象との相関をすべて検討するまでには至っていないと言える。今回の項目以外にも、声の大きさや高低、身振り手振り、視線等のさまざまな要素が考えられ、今後更なる検討をしていく必要がある。さらに、分類項目の選定においても、参考文献や母語話者のコメントを参考にしているものの、最終的には筆者自身が項目を選んでいるので主観を排除することができなかった可能性がある。

また、今回の学習者の中には、著しく良い印象を持たれる人がいて（例えば、「社会的望ましさ」という評価ではFM4、「個人的親しみやすさ」と「活動性」の評価ではFF3）彼らの評価が他の学習者より大きいことから、図1～図6ではFM4が、図7～図18ではFF3が影響を与えている。すなわち、今回の分析にもそれらが影響していることが考えられる。筆者が普段彼らに接している経験からすると、FM4は非常に真面目で

きちんとしている人で、FF3 はとても明るくて笑顔が絶えない人である。これらが発話ビデオにもよく出ていて、母語話者の評価にもそれが大きく作用された可能性もある。今後の調査においてはこのような点をも考慮して検討して行かなければならない。

付 記

本稿は、2005 年提出の修士論文の一部に加筆・改訂したものである。本研究は、文部省科学研究費補助金基盤研究 C (2) (代表者 宇佐美まゆみ) から一部の助成を受けて行った。この場を借りて感謝申し上げる。また、統計分析においては、東京都立大学博士課程修了生の宮田剛章氏から多くの助言をいただいた。記して感謝する。

参考文献

- 石崎晶子 (1999) 「学習者の言語行動に対する母語話者の評価」『第二言語としての日本語の習得研究』3、19-35
- 宇佐美まゆみ (1993) 「初対面二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー：話者間の力関係による相違—日本語の場合」『ヒューマンコミュニケーション研究』21、25-39
- _____ (2003) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ) 文部科学省科学研究費報告書 (基盤研究 C(2))」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、4-21
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美 (1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン—初対面二者間の会話分析より—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』2、130-145
- 小塩真司 (2004) 『SPSS と Amos による心理・調査データ解析 因子分析・共分散構造分析まで』東京図書
- 川名好裕 (1986) 「対話状況における聞き手の相づちが対人魅力に及ぼす効果」『実験社会心理学研究』26-1、67-76
- 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ—初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価—」『北海道大学留学生センター紀要』2、138-155
- 小林ミナ (2000) 「「何を」教えるかの再吟味へ—日本人評価研究の意義と限界—」『北海道大学留学生センター紀要』4、149-159
- 崔文姫 (2005) 「韓国人日本語学習者の言語・非言語に対する日本語母語話者の印象形成要因」東京都立大学 修士論文 未公開

- 西郡仁朗 (1997) 「外国人と日本人の初対面会話の分析—数量的に見た特徴と印象の形成について—」 文部科学省科学研究費報告書 (基盤研究 C(2)) 『日本人談話行動のSCRIPT・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』、58-74
- _____ (2002) 「自然会話データ『偶然の初対面』の公開 ~その方法論について~」 『人文学報』 330 号、東京都立大学人文学部、1-18 (転載：文部科学省科学研究費報告書 (基盤研究 C(2)) 『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』 (研究体表者：宇佐美まゆみ)、2003 年)
- 原田朋子 (1998) 「一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか」 『北海道大学留学生センター紀要』 2、157-167
- 渡部倫子 (2003a) 「日本語口頭運用能力の評価基準—評価者による相違—」 『日本教科教育学会誌』 25-4、11-17
- _____ (2003b) 「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価—評価尺度開発の試み—」 『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第二部 52、175-183
- J.D. ブラウン・和田稔 (訳) (1999) 『*Testing in Language Programs* 言語テストの基礎知識』 大修館書店

(ちえ むんひ・首都大学東京大学院生)